

全ゆる当局の分裂策動を粉碎するぞ！

本日10.3全明討詫集会に結集され、全ての学友諸君、この集会において僕達は、今后の明大斗争へのさらなる発展、深化を勝ち取らねばならぬ。

9月以来、大学当局は、僕達の斗争圧殺のために諸々の策動をろうしてきた。それが9.24にハサウエー山において開催されようとした、全明教職員大会であり、亦、9.26丸の内、工業クラブにおいて行なわれようとした、全明評議委員会である。学校当局は、果して何を意図してこの様なものを開催しようとしたのであるか。まさにそれは、自主改革路線を敷くことによる、校力への協力体制の確立の明文化である。ここにおいて僕達は、本年1.18.19日安田攻防戦における、加藤〈東大〉及び、その後必然的に各学園において登場した、その同類項が行なったハレンチ性をみる。「加ト体制」及びその同類項は、一方において国家校力＝校動隊を導入しつつ、他方において自主改革実行の「近代合理主義路線」を提起することにより、日共一民青右翼と一体となり、学力の「正常化」を計った。この加ト一郎は、その後の二郎、三郎…を生み出す悪しき範型を必然的につくったのであり、この加トメ郎めとして明大当局が、現在的に、僕達の運動を生きものとせんと、国家校力と連着してゐるわけである。（そのすじの話によると、現在、国家校力は明大斗争圧殺のためには、500名の校動隊を導入する用意が出来てゐる。）とりわけ、先日、我々が学校当局に対し国交応するよう要請したにもかかわらずこれを拒否し、その反面1%付讃賛新聞紙上にあいて書かれていだがごとく、僕達の運動を分裂せしめんとする意図が露骨にあらわされてゐる。学校当局・文部省、国家校力は一体となり、現在的な全国学園斗争、とりわけ、目の上のたんこぶである明大闘争を抹殺することにある。本日の新聞紙上明らかに、たゞやに、明日全明集会を開くことにより、その席に、結果的に全共闘を除外した形において行なう、斗争のギマン的收約を計る。という点で具体的に斗争圧殺のスケジュールを組んでいる。加ト〈東大〉は、株式会社ラグビー場において行なった、明治版である。彼らにあるのは、唯々、如何に学生を支配するかという学生対策しかない。僕達が提起した問題は、一般的な制度の手直しにより解決する問題ではない。根本的には、本質的に向かいかけであり、必然的に戦後支配の秩序に対する叛乱なのである。であるが故に、僕達は、自からの論理性と道義性により、さらに内懸を追求していく。

昨年來のば固斗争が、一般的改良斗争の粹をとびだし校力に對峙したのは、唯單に物理的にではなく、その思想、論理の暴力性、破壊性においてであつた故に、国家校力をして振惑せしめ、警察校力一校動隊による、斗争の圧殺があつたのである。

現在のかかる状況に対し、学校当局のギマン的收拾策を粉碎し、さらに学園諸所の統一戦線を勝ち取り、さらなる斗争の深化をけかり、今后の明大斗争、10.11月斗争に向けた強固な隊列を組む必要があるであろう。

僕達は、決してこの斗争を「コップの中のサザ波」としてはならない。